明治・大正・昭和を彩った流山の文化人―秋元家を取り巻く文化人たち　改訂版

２０２３・１１・２３　　田村哲三

流山の文化人を１人あげるとすれば秋元洒汀であろう。近年、小林一茶の人気からその支援者であった秋元双樹を第一とする声もある。しかし、双樹が一茶を中心とした狭い範囲の俳人とのかかわりに対し、洒汀は文壇画壇に多数の知己を有し、自らも句集の出版や小説の執筆、俳句研究会の立ち上げなど文学活動に目覚ましいものがあった。さらに画壇への支援や後続の文化人に与えた影響を考えると、まさに流山一番の文化人と言えるであろう。以下洒汀の活躍の足跡とその影響を受けた流山の文化人について述べてみる。

秋元洒汀（五代目平八、俳人、小説家）

明治２年（１８６９）、秋元分家４代目秋元平八の長男に生まれる。家業は秋元本家の味醂の販売部門で醸造業（酒・秋の月、醤油・君が代ほか）も手掛けていた。幼名は半之助。流山小学校、二松学舎を経て東京専門学校（現早稲田大学）に進学した。二松学舎時代から漢詩を作るなど文学に目覚めていたが、東京専門学校で坪谷善四郎と出会い文学の道に進むことになる。坪谷は新潟県加茂市の出身で、在学中から博文館の編集兼著者として活躍していた。のち編集長から取締役になった。水哉と号した俳人でもあり政治家でもあった。博文館は東洋一の出版社と言われ、傘下に英国ロイター社と提携した内外通信社、用紙の博進社、印刷の共同印刷、最大手取次会社の東京堂、大手書店の東京堂を持つコンツェルンであった。つまり情報、資財、印刷、出版、流通を自社で賄える大出版社であった。当然、多くの文人たちは博文館に出入りしていた。尾崎紅葉率いる硯友社には巌谷小波、田山花袋、江見水陰ら多くの文人がいたが、彼らも博文館の門をたたいていた。

半之助は坪谷を介して彼らと知り合い俳句や文学の道に進み洒汀と号した。卒業後は帰郷して結婚、家業を継ぎ５代目平八となった。しかし、文学への憧れはやみがたく、尾崎紅葉、巌谷小波らが俳句結社「秋声会」を結成するとすかさず参加した。洒汀は小説にも優れ、東京日日新聞（現毎日新聞）に短編小説「小野小町」を発表した。俳句では、明治３２年の「全国俳諧家選抜番付」に掲載されるなど高く評価された。明治３４年１２月、処女句集「胡沙笛」を白鳩社から出版した。これは明治期における個人句集の魁である。巻頭言の最後に　濡鷺堂に黄鳥の笹啼を聞きつつ　とある。口絵は東京美術学校教授の寺崎広業の作。明治４２年に完成した赤城神社拝殿の脇戸の絵は、寺崎の高弟によって描かれた。拝殿の再建は洒汀の尽力により完成したもので、ここにも寺崎との親交の深さを見ることができる。

胡沙笛の巻末の近刊予告には　秋元洒汀君著『武士の俳句』、秋元洒汀君著『句集・ぬれ鷺』がある。巻頭言で「ぬれ鷺」と「胡沙笛」の違いを見てほしいと述べているので、こちらも発行されたものと思うが確認が取れなかった。明治３５年、窪田空穂を編集者とした同人雑誌「山比古」は白鳩社から発行されたが、洒汀はこれを支援し自らも同人として活躍した。国木田独歩、島崎藤村、河井酔茗、金子薫園、水野葉舟、尾上紫舟らが作品を発表した。明治３５年１１月の「早稲田学報」には白鳩社発行図書として、秋元洒汀著『小野小町』（定価３５銭）、文学雑誌「山比古」（定価１０銭・本号１８銭）が掲載されている。『小野小町』のキャッチコピーには　「秘密の化身か艶色の権化か　美女か妖女か」　とあり読書欲をそそる。

明治４２年７月、流山に俳句研究会「平凡会」を創設、機関誌「平凡」を発行した。発行に際し祝詞は伊藤松宇、服部耕雨が、祝句は内藤鳴雪が寄稿した。会員１７名で寺田美月、清水一笑、須賀丸藤、

石井柳月、山崎松和、中村抱花、森田柏堂等々地元の名士と思われる人たちが参加した。光明院本堂、赤城倶楽部（赤城神社境内）が活動の場であった。会員には洒汀夫人も加わり「子供らが燻り絵かざす火鉢かな」を寄せた。外部会員には尾崎紅葉、夏目漱石、高浜虚子、角田竹冷、幸田露伴、河東碧梧桐、内藤鳴声、佐藤紅緑、中内蝶二ら錚々たる 32 名の文人が参加したが、江戸時代の月並調俳諧（類似句・陳腐化）を批判した日本派（子規主張の写生・写実による現実密着型の生活詠）と江戸俳諧との調和（折衷主義）を主張した秋声会との違いや、菱田春草の死などもあり約２年の活動で解散した。交友者には前出以外に大町桂月、田山花袋らがいた。

洒汀は若手の文学活動を支援していたが、最も大きな支援をしたのが画壇への支援であった。苦境の中にあった、岡倉天心率いる日本美術院の茨城県五浦での活動を支援した。五浦は日本美術院の日本画部門発祥の地ともいわれ、横山大観、菱田春草、下村観山、木村武山らは苦難の五浦から羽ばたいていった。その後の日本美術院の活躍を見るとき、秋元洒汀の支援の如何に偉大であったかがわかる。そのような中、特に目をかけ惜しまなかったのが菱田春草への支援であった。非凡な才能を持ちながら貧困と病（腎臓病、眼病）に悩む春草に救いの手を差し伸べた。生活資金として月２５円を送金した。病気平癒祈願を赤城神社で行い、前島密揮毫の掛け軸「赤城明神」を奉納した。しかし、願いむなしく明治４４年9月１６日、帰らぬ人となった。享年３６歳、５日後が誕生日なので３７歳ともいう。春草は失明寸前ながら「黒き猫」を描き、その前年には洒汀のために「落葉」を描いている。両画は国の重要文化財に指定され、現在は永青文庫（細川家）の所有になっている。

なお、赤城神社の祭神は明治以降「大己貴命」になったが、明治４４年であっても創建以来の祭神、赤城明神の掛け軸を奉納していることに注目したい。これは浅間神社にも言えることで、明治以降の祭神、木花之佐久夜毘売命に対し、富士塚の山頂には富士山の神である浅間大神を祀っている。政府の方針とは別に地元の心意気と信仰の姿を垣間見るようである。しかし、軍国主義を経てそのような心意気も失われてしまったようだ。

洒汀は現流鉄の開設や旧流山銀行の創設に尽力し、流山発展の礎ともなった。しかし、大正から昭和にかけて家業継続の困難な時代に遭遇し廃業を余儀なくされた。蒐集していた多くの美術品も手放さざるを得なくなった。晩年は読書三昧の日々を過ごしたが昭和２０年１月、７６年の生涯を閉じた。酒汀の功績は文人墨客との交流やその支援のみでなく、文化活動を通し多くの人びとに影響を与えたことであろう。とりわけ流山の地に、洒汀の後継者を誕生させたことの功績は高く評価できる。

酒汀の主な俳句

秋風にやもめの蝶の吹かれけり	戯るる牛の尾細し春の草	梅雨の窓眼鏡の翁篆刻す
落葉して五重の塔のあらは也	沙魚釣の帰る夕やいわし雲	新しき暦に古き明治哉

秋元梧楼（秋元常五郎、秋元本家家業、運送業、俳人）

明治１０年（１８７７）茨城県玉里村（現小美玉市）に農業矢口半介の 5 男として生まれる。本名矢口常五郎。秋元本家に婿入りして秋元常五郎となった。当時秋元家では 9 代三左衛門（久太郎）が病弱のうえ１０代目（良尚）が幼少であったので、久太郎の長女寿わ子と結婚して秋元本家の家業を支えた。幼少から俳句の素養があった常五郎は梧楼と号した。秋元洒汀の俳句活動に共鳴し、特に高浜虚子に心酔した。虚子から虚受の俳号を贈られる。明治４４年、洒汀の主宰した「平凡会」が解散すると、翌月、それを引き継ぐように俳句誌「ツボミ」を主宰発行した。活動の中心は梧楼と松本翠影で、会員は秋元

淘綾（良尚)、秋元洒汀ら１１名。明治４５年、東京下谷の花月での写真には３２名が写っているが、東京の外部会員（支援者）との交流会と考えられる。月１回光明院本堂を活動の場とし、内藤鳴雪ら子規庵句会のメンバーが交代で選者をつとめた。大正 2 年、１０代目三左衛門の誕生に伴い、秋元本家での役目を終えた梧楼は土浦に分家し運送を業とした。また、翠影も東京に移住したことから「ツボミ」は解散となった。

しかし、秋元梧楼の俳句にかける情熱はそれだけではなかった。大正元年（１９１２）と大正２年に『明治百俳家短冊帖』を編纂発行した（版画)。天之巻、地之巻、人之巻の三巻からなり、明治時代の俳人１００人の句を選び短冊に書いたもの。各巻とも当代の大家に揮毫や俳画を依頼した。中でも地之巻は小川芋銭（日本画家、書家、俳人）が担当した。同書が発行されると新聞各紙は「まさに空前の名作」と評し、梧楼の蒐集とその作業を絶賛した。巌谷小波は嵯峨の小倉で編纂された『小倉百人一首』と同列と評しているが、同書は流山で編纂されたもので「流山百人一句」とも言うべき流山の最も誇るべき俳句文化の一つである。

梧楼の出版活動はこれだけではない。大正９年（１９２０)、『三愚集』を仏画堂から出版した。梧楼が一茶の俳句を２７作選び、夏目漱石が揮毫し芋銭が俳画を書いたもの。彫刻は大倉半兵衛の手による。漱石は序文で

「句ハ一茶　画は芋銭　書は漱石　それ故三愚集といふ句を作りて後世に残せる　一茶ハ気の知れぬ男なり　其句を画にする芋銭は入らざる男也　頼まれて不得己（やむをえず）一茶の句を寫せる漱石ハ三人のうちにて一番の大馬鹿なり　三愚を一堂に会して得意な秋元梧楼に至って賢可愚可殆んど判しかたし　四十五年五月　漱石」

と書いている。ここにも梧楼の俳句文化に対する情熱を見ることができる。一茶の句を選んだことは、双樹と一茶の交友が秋元本家に何らかの形で伝承されていたとも考えられる。それにしても、自ら俳人となるだけではなく、優れた俳句を後世に残すべく、最も労力と費用の掛かる出版に踏み込んだ心意気こそ文化人の誉れというべきであろう。

土浦で運送業を営んでいだ梧楼は、土浦町議となり町の発展に尽くしていた。ところ火災が発生して家屋など焼失してしまった。梧楼は再興を図るとともに、昭和６年、土浦に「東郷議会」を創設して会長になり会員千余名集めた。東郷平八郎には流山時代から知遇を得て崇拝していた。東郷が揮毫した額「質実剛健」は梧楼より土浦一高に寄贈された。梧楼は東郷を介して中国の革命家孫文などとも交友を持った。太平洋戦争で土浦の街は被害を受けたが俳句の道は捨てがたく昭和２２年、俳句誌「みづうみ」を発行した。しかしその句誌も昭和３０年、梧楼の急逝により終わりを告げた。享年７８歳。

以上が秋元梧楼の足跡であるが、自らの俳句活動だけではなく、多くの著名人との交流や出版活動を見るとき、俳句文化に貢献した功績は秋元酒汀に劣らない。まさに文化人である。

梧楼の主な句

家成りて春のながめや湖に山に　　山影の波揺れも見ゆ青簾　　梅青き寺庭の遠く赤き塔

松本翠影（松本半次郎、俳人）

明治２３年（１８９１)、流山の材木商に生まれる。本名半次郎。豊山中学３年の時、俳人内藤鳴雪に師事し俳句の道に入る。早稲田大学に進むが家業のため学業半ばで帰郷。明治４４年、平凡会に属するが平凡会解散後は秋元梧楼が主宰した「ツボミ」に参加、梧楼と共に中心的な存在として活躍した。大

正３年（１９１３)、家業をたたんで上京、本格的に俳句の世界に入った。俳句誌「ましろ」「新緑」を編集発行、昭和１４年（１９３９）に俳句誌「みどり」を主宰発行して活動の拠とした。昭和５０年没、享年８４歳、光明院に眠る。流山での活動は短いが、秋元洒汀や秋元梧楼の影響を受けたことは間違いなく、流山の俳句文化を継承した一人ということができる。

発行図書
　『俳壇・俳人・俳風景』松本翠影著　昭和１０年　真白社発行　　『朱の幡ー松本翠影句集』
代表的句
　松毬のからからと秋気澄みにけり　句碑　光明院
　鶴の檻さくら吹雪の中にあり　句碑　上野公園清水観音堂内

秋元淘綾（秋元良尚、１０代目三左衛門、俳人）
　明治２３年（１９８０)、９代目秋元三左衛門の長男として生まれる。本名良尚、号淘綾。流山小、開成中学を経て慶應義塾大学に進学するも明治４３年（１９１０)、９代目の死去により中退して１０代目秋元三左衛門となる。幼少時から洒汀や梧楼の影響を受けて俳句の才能を開花させた。「平凡会」が結成されると１９歳の若さながら参加して活躍した。明治４４年（１９１１）１月、俳句誌「平凡」が刊行されると発刊の辞を寄せた。要旨は次のようである。
「時代の推移、趣味の向上は徒らに旧態を墨守するを許さず。今後の趨勢に鑑み、相互の意思を疎通して真面目にこの道を勧奨するよう講じたい」
　文面からは秋声会と日本派の主張の違いに揺れる平凡会の様子が読み取れる。また、洒汀が主宰した平凡会であるが、巻頭言を飾ったことは行く末を淘綾に託したようにも取れる。しかし、まもなく平凡会は解散した。明治４４年、「ツボミ」が発足すると会の幹事役を引き受け、流山の俳句を牽引したがやがてツボミも終焉を告げた。
　淘綾は俳句以外でも多趣味であった。盆栽もその一つで盆栽協会の副会長も務めた。また長唄、謡曲にも長けていた。他の文化人を支援するのは秋元家の血筋なのか、歌舞伎の尾上菊五郎、市川猿之助、沢田正二郎などを贔屓にした。日本赤十字社の篤志家社員にも名を連ねた。他に町議なども務めたが、昭和３０年（１９５５）その生涯を閉じた。享年６５歳。

代表的俳句
　朝潮や鯨に遠き壱岐対馬　　街道の首無き地蔵や村時雨　　池の隅水仙の花ひょろり哉

秋元松子（洋画家、日本画家、歌人）
　明治３２年（１８９９）生まれ。幼少時から父洒汀の影響を受け、少女時代には洒汀が支援した菱田春草から日本画の手ほどきを受けた。跡見学園に進学すると校長跡見花蹊に日本画の指導を受ける一方、佐佐木信綱に和歌を習い竹柏園門下に入るとその才能を開花させた。大正１１年(１９２２)、竹柏会叢書歌集『黄水仙』を出版。後に雑誌「明星」の表紙を飾り、与謝野晶子、山川登美子と並んで「明星三才媛」と呼ばれた。茅野雅子主宰の短歌会「春草会」に加入し若手歌人として活躍。大正 11 年６月１８日、秋元松子宅で開催された「春草会」では竹久夢二が「我旅は流転輪廻の果て知らず今日江戸川の岸に漂ふ」と江戸川での舟遊びを詠んでいる。当日欠席した芥川龍之介からは歌集謹呈の御礼と会欠席の詫び

状が、松子宛に送られている。

大正１５年（１９２６）、洋画家岡田三郎助に師事を受けると洋画家として頭角を現し白日会、朱葉会に属し、白日賞を２度受賞した。昭和６年（１９３１）、帝展に入選する。昭和１０年（１９３５）、白日会の会員であった笹岡了一と結婚、根津に所帯を持つ。松子３６歳、笹岡２８歳。笹岡は後の新津市（現新潟市）の生まれ。新津市は坪谷善四郎の生まれた加茂市の隣町、坪谷の橋渡しがあったのかもしれない。昭和２０年に流山に帰郷、戦地から復員した笹岡と流山に住みながら洋画家として活動します。光風会展、日展、女流画家協会展などで活躍、昭和３２年、日展特選受賞。昭和３５年からは日展委嘱。流山美術懇話会、千葉県展、昭和５２年の流山市美術家協会の設立や市展の開催に尽力。千葉県教育功労賞、紺綬褒章章を受章。昭和５９年、歌集『紅薔薇』、平成５年、歌集『月光』を出版した。

平成７年、９５歳で生涯を閉じる。日本画家、洋画家、歌人と多彩な才能を有し、多くの文人、画人と交流を持った文化人であった。松子晩年の歌の「ひたむきに齢も忘れて画筆持つこの幸せを尊しと思う」に彼女の人生を垣間見ることができる。

松子の歌　　突如として逝きし夫（つま）におくる（直筆原稿から）

いまひとたび いまひとたびと 終にはかなく 物言はぬ夫（つま）
苦しみて 苦しみて終に 果てし夫（つま） 今は静づかに ここに眠れり
つくせども 君の心に添えずして 悲しき妻なりき 今は空しく

笹岡了一（秋元了一、洋画家）

明治４０年（１９０７）、後の新津市（現新潟市）に生まれる。骨董好きの父の影響を受けて、幼少から絵画に馴染み山水画などを模写して過ごした。中学中退。昭和５年、白日会で初入選、第１回新潟県展で特選一席を受賞。そこで富田温一郎、安宅安五郎と出会う。昭和６年、白日賞を受賞し帝展に初入選を果たすと上京して安宅安五郎に師事する。昭和１０年、白日会会員の秋元松子と結婚して秋元了一となり東京根津に所帯を持った。しかし、画壇では笹岡了一の名で通した。戦争では３回も応召され苦難の道を歩んだが、絵筆は離さず戦地でのスケッチを松子に送り続けた。

戦後は先に帰郷していた松子の郷里流山に居住し、絵画活動を続けた。しかし、松子の家には洒汀なく、家業は廃業していたため生活は苦しかった。そのような中で、２人は流山の地から中央画壇へと発信していった。笹岡は日展評議員、光風会常任理事、千葉県美術会会長、日本美術家連盟委員、流山美術会会長など要職を歴任し、受賞では昭和５３年、第１０回日展で内閣総理大臣賞を受賞した。千葉県教育功労賞、同文化功労賞、新潟日報新聞文化賞、勲四等瑞宝章も受賞した。また、流山では昭和２２年、自宅において流山美術懇話会を発足し例会や作品批評会、画法の指導などを行った。会は昭和２６年に発展的解消をしたが、昭和３０年、流山町文化団体協議会を結成して文化祭を開催した。会は昭和４５年に流山市文化団体協議会に、昭和５２年には流山市美術家協会へと発展した。昭和５５年には第１回流山市展が開催された。

昭和２８年にさかのぼると、笹岡と松子は評論家柳亮が主宰する JAN 絵画研究所「黎明会」に入会して研鑽を積むが、さらなる発展を展開するため自宅にアトリエを建設、昭和３２年、「L・T・S 笹岡絵画研究所」（L＝黎明、T＝千葉、S＝笹岡）を開設して後進の指導にあたった。昭和６２年、笹岡が亡くなると研究所は松子が引き継いだが、松子が没すると解散にいたった。平成１３年、研究所のアトリエは市の施設として整備され「杜のアトリエ黎明」と生まれ変わった。なお、東京新聞で連載、講談社で刊

行された松本清張による「清張通史」の挿絵は好評であった。

以上述べてきたように笹岡了一は画家として中央、地方において発信を続け、後進の指導にあたったことは、文学の発信とは異なるが、洒汀他の文化人同様流山の誇れる文化人であった。昭和６２年没、７９歳。戦前の兵役と戦後の経済のどん底での絵画活動はけして楽なものではなかった。松子の逝きし夫におくる歌の「苦しみて苦しみて終に果てし夫今は静かにここに眠れり」に現れているようだ。

＊本稿は平本さんから提供された資料と筆者の資料を合わせて作成したもので、平本、田村の合作である。